
知と知の死闘

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

知と知の死闘

【Nコード】

N6068A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

92年日本シリーズ。圧倒的な戦力を誇る西武に対してヤクルトの将、野村とヤクルトナインは死力を尽くして立ち向かう。その果てにあるものは。プロ野球史にその名を残す野村、森の知略を尽くした死闘です。

第一章

死闘

知と知の

かつて多くの死闘が行われてきた日本シリーズ昭和二十五年に我が国のプロ野球界がセリーグとパリーグに分かれて以来毎年行われ多くの戦いが演じられてきた。

かつては鶴岡一人が巨人に戦いを挑んだ。三原脩と水原茂が三年間に渡り遺恨試合を行った。闘将西本幸雄は八回も日本一に挑みながらも遂に果たせなかった。そこには人々の心を打つ様々なドラマがあった。

そのドラマの一つにある戦いがある。それは将達が知と知を尽くし、選手達が死力を尽くし戦い抜き勝利を、栄冠をその手に勝ち取った戦いであった。

その年のセリーグのペナントは予想外の展開であった。昭和六十年の日本一の後深い沼の底に沈んでいた阪神と長い間弱小球団と蔑まれていたヤクルトが激突したのであった。

結果はヤクルトが勝利を収めた甲子園球場で胴上げ投手となった伊東昭光はその瞬間飛び上がった。野村克也は南海の時から数えて二回目の胴上げであった。

そして日本シリーズとなった。対するは当時黄金時代にあった西武、率いるは森祇晶である。

この二人には面白い共通点がある。それは二人共知将と謳われた人物であると共に捕手出身の監督であるということだ。両者共選手としての日本シリーズの経験も豊富である。そして一時代を築いた捕手であるということだ。

二人の仲の良さは知る人ぞ知るものである。野村と長嶋茂雄の仲の悪さは実に有名であるが森と長嶋が意外と仲がいいのは知られていない。だがそれでもこの二人は仲がいい。森は現役時代日本シリ

一ズ前になると野村の家へ泊り込み相手チームの選手について教えてもらっていた。それを教える野村の情報量は実に多く、またその分析も鋭く正確だった。巨人がロッテのミサイル打線を封じたのも韋駄天と謳われた福本豊の脚を封じたのも彼の情報によるところが大きかったのだ。

その為二人には同志といった感じが強かった。捕手ということに特別のこだわりを持つ彼等はそれだけに共感を覚える部分も多かったのである。

話は変わるが野村克也という人物はそのささやき戦術でも有名である。相手チームの選手を必要以上に持ち上げたりけなしたりする事で惑わせ動揺を誘うのである。そしてそこにつけ込む。かつてそれで多くの敵を倒してきた。

だが森はそのささやき戦術については安心していた。それは何故か。前述の通り同志であり共感を覚える相手だったからである。しかしその考えは甘かった。

野村は森に対してもそのささやきを仕掛けて来た。昔の事まで持ち出して言ってくる。これに対し森は無視する。挑発に応じるような森ではないしまった応じた時の怖ろしさもよく理解していた。かつてそれで長嶋がどれだけ負けたことが。

だが森が無視すれば野村はまた言う。マスコミがそれを面白がって取り上げる。森は思わずばやいてしまった。

「野球以外の話が多過ぎる」

試合前の前哨戦は野村のペースで進められた。

だが野村もそうせざるを得なかった。例え相手が森であろうとまささやきは仕掛けるつもりであった。だがこの時は今までにも増してその裏には危機感があった。

野村が率いるヤクルトは阪神とのペナントを紙一重で勝ち抜いていた。戦力的にも心もとなくまた怪我人も多かった。

信頼出来る先発は岡林洋一と伊東しかない。荒木大輔や高野光もいるが怪我からようやく復帰したところである。

抑えもない。またパワーを誇った野手陣も若く勿論シリーズの経験なぞ皆無である。一枚もカードに余裕は無かった。

否、そのカードでさえまともに勝負出来るかどうか甚だ心もないう状況であった。

対するは西武。黄金時代であり投手陣も野手陣も万全の状況である。その戦力はあの王、長嶋を擁していた黄金時代の巨人をも凌駕すると言われていた。投手には郭泰源、工藤公康、渡辺久信、そして石井文裕。野手陣は当時最高の捕手と言われた伊東勤を扇の要に清原和博、秋山幸二、デストラーデ、石毛宏典、辻発彦、平野謙。そうそうたる顔触れが揃っていた。

『西武圧倒的有利』誰もがそう言った。西武の四戦全勝、若しくは四勝一敗で西武が勝つと殆どの者が予想していた。『王者西武にあのヤクルトが勝てるものか』、『これは今までで一番戦力差のあるカードだ』そう言う者達すらいた。

そうした中のプレーボールであった。十月十七日、秋晴れの日の下で試合が始まった。西武の先発は渡辺久信、ヤクルト

は岡林であった。まずはデストラーデが得意とするシリーズ初打席アーチを仕掛ける。これに顔を暗くしたのは神宮の一塁側だった。

それに対し野村は果敢に攻撃を仕掛けて来た。切り込み隊長飯田哲也のプッシュバント、そして投手の岡林のバスターエンドラン。しかしそれは西武のセカンド辻の見事な処理で防がれた。森はそれを見て余裕の笑みを浮かべた。

「当然やってくると思っていた。あつちは変わったことをやって成功すれば褒められる。楽だな、あちらさんは」

それに対し野村は気を引き締めた。

「やはりな。一筋縄ではいかんわ。そう簡単にだませる相手やない。彼は試合前に西武の守りの中心であるその辻や石毛がグラウンドでボールを転がしているのを知っていた。そうしてグラウンドの地を見ている、西武の野球は違っていた。その事を野村は誰よりも知っていたしまた恐怖していた。」

だがその恐怖に将自身が捉われたならばその時点で負けである。野村はそれを封じ込め、西武に気圧されているチームに喝を入れる為にあえて積極策を執ったのだ。だが喝は監督ではなく選手の一人が入れた。

岡林のバスターエンドラン失敗の後飯田に打席が回った。二塁には岡林が送った形になった筈篠賢治がいる。飯田はここでエンタイトルツーベースを放った。これで同点となった。

次は荒井幸雄、小柄な左打者である。彼はバットをコンパクトに振り抜きボールをライト前に運んだ。二塁ランナーの飯田は三塁ベースを回った。

西武のライトは平野。俊足、堅守、そして強肩で知られる。彼はボールを素早く処理し冷静にバックホームを放った。

神宮の緑の芝の上を白いカッターは切り裂いていくようであった。それがワンバウンドでキャッチャー伊東のミットに収まる。伊東は立ち上がった。そして三塁とホームの間のラインに仁王立ちして突入して来る飯田を殺さんと待ち構えていた。

だが飯田は突っ込んで来なかった。飯田はそこにはいなかった。伊東が捕球してタッチに向かおうとしたそれより前に彼の左足を迂回してその背に回り込んでいたのだ。

伊東は追う。しかし飯田の動きは速かった。彼は左手から滑り込んだ。そして右手首のスナップを効かせホームを叩いた。難攻不落と呼ばれ西武のホームを死守してきた伊東から果敢にホームを奪ったのだ。

「セーラーフッ！」

主審の右手が横に切られる。神宮の社が喚声に包まれた。

それは観客だけではなかった。ヤクルトナインにもそれは伝わった。

“やるんだ、そして勝つんだ！”

今まで王者西武に吞まれていた戦士達が息を吹き返した。彼等の目に光が宿った。

ヤクルトナインは奮い立った。そしてこの時西武を睨み付けた。

“ やつてやる、日本一になってやる ”

それにまず応えたのが古田であった。六回にソロアーチを飛ばした。これで三対二。試合はヤクルト有利となっていた。

しかし相手もさるものである。土壇場の九回に石毛の犠牲フライで同点に追いつく。試合は振り出しに戻り遂に延長戦に突入した。

延長十二回、勝負はもつれ込んだ。神はここでドラマを演出した。ヤクルトはこの回秦真司の二塁打等で一死満塁の絶好のチャンスを作る。だがマウンドに立つのは西武の誇るストッパー鹿取義隆。

巨人時代よりシンカーとピンチでの強さを知られた男である。野村はここで代打を送った。

「代打、杉浦」

このアナウンスを聞いた時場内は呆気に取られた。皆驚いていた。誰かが言った。

「 こんな時に何であんな老いばれなんだ！ 」

そう言ったのも無理は無いだろう。杉浦亨。かつてのヤクルトの日本一の時の最後の現役選手である。この時四十歳であった。

かつては弱小スワローズを一人で支えた主砲であった。だがそんな彼も寄る年波には勝てずこの年の前年には野村に引退を申し入れていた。だが野村に引き留められそれを思い留まった。自らも長い現役時代を送った野村の優しさだったのだろう。色々と言われているが野村にはこうした優しさもある。だからこそ彼をいまだに慕う者が多くいるのである。

だが話はそう上手くはいかないものである。彼は腰痛等で二回の二軍落ち。打率一割八分二厘、ホームラン僅かに二本。かつてのスラッガーの面影は何処にも無かった。

この時も左足以外は全て故障していた。まさに満身創痍の状況であった。

(これが最後の打席かも知れないな)

彼はそう思ったかもしれない。この年で引退しようと決意してい

た。彼は腹をくくった。

(それならば！)

こういった極限の状況の時人はどれだけ腹をくくったかで決まる。そう、彼はそのバットに自らの全身全霊をかけたのであった。

忽ちツーストライクまで追い込まれた。

「やっぱり駄目だ……」

観客のうち何人ががそう溜息をついた。神宮の社は既に夕陽がさしていた。太陽が沈もうとしている。

三球目だった。鹿取は投げた。内角だった。

杉浦はそれを思いきり振り抜いた。乾いた打球音がスタンドに響いた。

ボールはゆっくりと舞い上がっていった。誰もがそのボールの行方を追った。

(まさか……)

最初にそう思ったのは誰だっただろうか。ボールは高々と舞い上がる。

そのボールの行方を杉浦も追っていた。ヤクルトナインとファンは心の中で絶叫した。

(入れ！)

その思いがボールに、神に伝わったのであろうか。それとも杉浦の渾身の力がそうさせたのであろうか。あるいはその両方か。ボールはライトスタンド上段に吸い込まれた。

どれだけの時が流れていたのであろうか。それは一瞬の筈だったが、だがその一瞬は永遠とも思える長さであった。

杉浦のバットは投げられ乾いた音を立てグラウンドを転がっていた。バットが寝転がりその動きを止めるよりも先だった。

場内は大喚声に包まれた。三万四千七百六十七人で埋められたスタンドが爆発かのようなだった。

長い日本シリーズでもはじめての記録だった。

『代打満塁サヨナラホームラン』

それを今この引退間際の男が成し遂げたのである。
ヤクルトベンチは喜びに包まれた。劇的な勝利に沸き返るナイン。
杉浦はダイヤモンドを回る。彼はこの時泣いていた。長い彼の野球
人生の中でも忘れられぬ一打であった。

こうして四時間四分に渡る第一戦はヤクルトの勝利に終わった。
ヤクルトナインもファンも思った。

“もしかしたら勝てる”

だが一人口元を引き締める人物がいた。野村である。

「これ位で引き下がるような連中やあらへんし、参るような奴やあらへん」

誰よりも西武の、そして森の怖ろしさを知っていたからだ。

事実野村は試合を見て内心驚いていた。西武のその守備である。

「守りが固い。極端にシフトを敷いてくるわ。それに」

辻や石毛の事が脳裏に浮かんだ。

「打球を打った瞬間もう足がボールの方へ半歩踏み出しとる。これは厄介な奴等やで」

野球において守備の占める割合は素人が考えるより遙かに大きいとある球団が大砲をどれだけ集めようとそれがなかなか勝利に結び付かず優勝を逃し同じ間違いを飽きもせず繰り返しているのはこの守備をおろそかにしている事が第一の要因である。

それだからこそ彼はこれからの勝負がヤクルトにとって容易でないといわかっていた。彼は内心苦悩していた。

第二戦、西武の先発は郭泰源、ヤクルトは荒木大輔であった。

オリエンタル超速球と言われその速球と高速スライダーを武器にした男。このシーズンも抜群の安定感で十四勝、防御率は二・四一と投手陣の大黒柱であった。

対する荒木はかつて甲子園を湧かせた男。しかし度重なる怪我に苦しみ続けた。

だがこの年の後半奇蹟の復活を遂げマウンドに戻って来た。後の無い崖つぶちの試合で常に投げ、ことごとく勝ってきた。しかし郭

を前にしてヤクルト打線はあまりにひ弱だった。

この日の郭は絶好調だった。飛ばす。打てない。ヤクルトは一回に飯田が内野安打を打っただけだった。怖ろしいまでのピッチングだった。

森の理論の特徴としてシリーズの第二戦を最重要視するという点がある。その時に送り込んだ投手こそ郭だったのだ。

野村もシーズン前に言った。

「第二、三、五、七戦が山場や」

と。その通りであった。郭はその重要な試合でヤクルト打線を完全に抑えていた。

二塁すら踏ませない。抜群のコントロールであった。野村はチャートを見て舌を巻いた。

「真中のボールは一球もあらへん。隅っこばかりや」

これ程の投手を打てるのはそうざらにはいなかった。

しかし対する荒木も粘る。彼にもプライドが、そして意地があった。

だがその意地も打ち砕かれた。六回、西武の主砲清原にツーランホームランを浴びてしまった。

これで森は勝利を確信したのだろう。六回裏にレフトを守っていた大砲の一人デストラーデを引っ込め代わりに俊足の笹篠誠治を入れた。野村はこれを見て忌々しげに呟いた。

「六回の攻撃が終わって守備固めに入る野球なんてわしゃあ初めて見たわ。二点あったらおつりがくるつちゆうんかい」

だがその通りだった。郭はその回も無失点に抑える。最早精密機械の様なピッチングだった。

しかし運命の女神とは実に気紛れなものである。これはどの世界においても変わりはない。この世の真理の一つでもある。

七回に事件は起こった。打席にはヤクルトの主砲ジャック・ハウエルがいた。

ハウエルの打球は郭を襲った。それは彼の右親指を直撃した。

郭は右投手である。これは危機を意味する。止む終えなく彼は退場することとなった。

代わりにマウンドに上がったのはもう一人のストッパー潮崎哲也であった。彼は監督の期待に応えヤクルト打線をよせつけない。結局試合は清原のホームランを守りきり西武が勝利を収めた。西武ファンもマスコミも思った。やはり西武は強い、このまま優勝だと。

しかし何故か森の顔色は晴れなかった。元々感情を表に出す事を好まない傾向のある人物であるがこの時はそれが何時にも増して強かった。

次の試合は西武の本拠地西武球場で行なわれる。移動日となった十九日、森はレギュラーの野手陣に休養するよう伝えた。そして投手陣の練習にも顔を見せず一人監督室にこもっていた。

そこで彼は第一戦及び二戦が終わった時点でのデータ分析を行なっていた。そして第三戦以降のローテーションの組み立てについても考えていた。

彼は野手陣には手ごたえがあった。石毛や辻の守備、清原やデストラーデのバッティングを見て彼は選手が相手をよく観察していると思っていた。そしてそう発言した。実際野村は石毛や辻の守備に脅威を覚えていた。これこそが野村の野村たる所以でもあった。彼は守備の持つ力をよく理解していた。そしてそれは森も同じであった。

だが守備は野手だけではない。もう一つの要として投手がある。否、投手こそが守りの、野球の最も重要な部分なのだ。

西武の投手陣は万全をもって知られていた。第一戦で先発を務めた渡辺も郭もそうであるし抑えの鹿取や潮崎もそうであった。西武は投手王国としても有名であった。

だがその投手王国の最も重要な人物のうちの一人がこれまで出ていなかった。西武の左のエース工藤公康である。

この時彼はシリーズ前の練習で左ふくらはぎを痛めていた。一時は回復したが第一戦の試合中の投球練習で再び痛めてしまった。回

復は暫くかかる。その為ローテーションに不安があったのだ。

しかも郭もない。肝心の投手陣に左右の両輪が欠けてしまいかねない状況だったのだ。そしてそれは野村の耳にも入っている。森は思案していた。

(第四戦はあの男を使うか……)

森はこの時ある策を思いついた。そしてそれは彼の起死回生の秘策であった。

第二章

だがそれを明かしヤクルトに仕掛けるのは第四戦である。第三戦は西武は石井丈裕、ヤクルトは後にヤクルトのエースとなり大リーグに渡る石井一久であった。

この年石井丈裕は沢村賞を受賞している。森が郭と共に最も信頼する投手の一人だった。

「この二人で二勝は計算出来る」

森はそう言った。それだけ彼を信頼していたのだ。

彼はその信頼に応えた。内角を速球で攻め立て腰を引かせた後に外角へ投げる。かと思えば外角を意識させ内角を攻める。彼はヤクルト打線を広沢のホームラン一本に抑えた。

対する石井一久はまだ高卒一年目のルーキーである。如何にドラフト一位指名でありその剛速球があるとはいえこの年にはまだ一勝もあげてはいない。だがその彼を先発に送らなければならない程ヤクルト投手陣の台所事情は深刻であったのだ。

彼はその剛速球を主体に投げる。彼も必死であった。死力を尽くして投げる。しかしそれだけで勝てる相手ではなかった。三回三分の一、二失点で無念の降板となった。

その後二対一で試合は進んでいた。

『あと一点……!』

だがその一点があまりにも遠い。そして八回裏となった。

遂にヤクルトの中継ぎ陣が西武打線に捕まった。四失点を許し試合を決定付けてしまった。これでこの試合は終わりだった。

これで二対一。西武はヤクルトの先勝なぞ意に介さずあっさりと形勢を逆転させてしまった。

西武ナインは風がこちらに向いてきたのを感じていた。しかし森はそれよりも重要なものをこの試合で見出していた。

「このシリーズはこの男に預けた」

彼は石井丈裕を見た。彼を郭が戦線離脱し工藤の出番が遅れている先発投手陣の柱にする事に決めたのだ。

そして第四戦。森はここで意に秘めていた秘策を遂に出した。

ヤクルトの先発は大方の予想通り岡林中三日の登板である。問題は対する西武であった。

「渡辺久信だろ」

誰かが言った。だが森はあえて彼を使わなかった。

先発のマウンドにいたのは確かに渡辺であった。だがそれは渡辺智男であった。

このシーズン制球難に苦しみシーズン後半には三軍落ちまでしている男である。これには西武球場にいた誰もが啞然とした。

「森はこの試合負けるつもりか！」

誰かが野次を飛ばした。そう、彼はこの試合負ける事を覚悟である秘策を胸に秘めていたのだ。

岡林は絶好調で飛ばしていた。彼はもう負けられない、ここで負けたら後が無い、と鬼気迫る形相で投げていた。その前の試合に石井一久と中継ぎ陣を打ち崩した西武打線も思うように攻められない。対する渡辺は予想通り制球に苦しみ四球を連発する。だが得点だけは許さない。

「ここだ……」

二回と三分の一を投げたところで森は動いた。そして主審に告げた。

「ピッチャー鹿取！」

「な……」

これには観客席もヤクルトナインも驚いた。何と抑えの切り札を三回で投入してきたのだ。

「こんなところで鹿取を出してくるとはな。思いきった事をしてくれるわ」

野村も苦虫を噛み潰した。森の奇策とはこれだったのだ。

鹿取はヤクルト打線を見事に抑える。第一戦での悪夢が嘘のような投球だった。

しかし岡林も引き下がらない。西武の強力打線を力でねじ伏せる。だが西武の力は絶大である。四回、バッターボックスには大砲の一人秋山が入った。

抜群の運動神経を誇り驚異的な能力で攻守走の要となっていた彼は後にダイエーで個性派揃いの荒くれ者達を見事に纏め上げていた人格者でもある。温厚で穏やかな人柄で知られる。

だがそれが森をはじめ首脳陣には歯がゆかったのだろう。西武の顔に成長していた清原と比べ何かと秋山のプライドを傷つける発言を繰り返していた。

このシリーズでも例外ではない。第三戦の前野手陣に休養指令を出した時だった。

主力陣は休養を返上して練習に励んでいた。だがそこに秋山の姿は無かった。彼だけ言われた通りに休んでいたのだ。

「一番当たっていない奴がない」

森は呟いた。彼の補佐役でヘッドコーチを務める黒江も言った。

「あいつには責任感が無いのか」

だがそこには秋山の奮起を促す目的もあった。そして彼はそれに乗った。

秋山のバットが一閃した。打球はそのままスタンドに入った。

この一打で勝負は決まった。岡林は一球に泣く事となった。

鹿取の後は潮崎だった。彼がセーブを挙げ西武はこれで王手をかけた。

三試合共西武の投手力がものをいった試合だった。打高投低のチームにとってはつらい試合展開だった。

三試合で打点一。とりわけ主砲パウエルは十三打数一安打六三振。完全に抑えられていた。

「パウエルはこのまま眠ってもらおう」

森は言った。これは彼の持論の賜物であった。

「相手チームのキーマンを潰せばそのチームの攻撃力は格段に落ちる」

それが彼の持論、彼はそれに基づき現役時代よりシリーズで多くの選手を封じてきた。

阪急のスペンサー、福本、ロッテのアルトマン、巨人のスミス、クロマティ、中日の落合。そして彼は今までシリーズで勝利を収めてきたのだ。

これによりパウエルは封じられてしまった。だがキーマンを封じられると他の者も連鎖的に動けなくなるのがこの作戦の恐ろしいところだ。

「古田まで打てんようになるとはな」

野村は舌打ちした。野村も突破口を開こうとする。スチール等で西武を掻き回そうとする。

だが鉄壁の守備を誇る西武にそれは容易ではない。とりわけ伊東の肩の前にスチールを試みたランナーが次々と刺されていった。これもまた森の野球であった。

「相手の攻めの芽を摘んでいく」

それこそが森野球であった。対する野村は唇を噛んだ。

「うちの野球になつたらんわ」

ヤクルトは若いチームである。勢いに乗れば強い。だが一度立ち止まるとなし崩しの負けていく。それはシーズン中でもそうであった。連敗により優勝は絶望的とさえ見られていた。

しかし森は気を緩めない。シリーズとはきつかけ一つでその流れが大きく変わる。その事例の多くを自分の目で見てきたからこそそれがよくわかっていた。

第三章

第五戦、西武は今日勝てば本拠地での胴上げ、三連覇達成だ。対するヤクルトは本拠地に帰ることなく敗れ去る。野村は腹をくくつた。

「ここはあいつに全てを任せた」

先発は西武が渡辺久信、予想より一日遅れだった。森はセオリー通りに手を打ってきた。

しかし彼の顔は晴れない。試合前彼は激励に来た知人に言った。

「第六戦の切符を用意しておいてくれ」

彼もまた目の前にいるヤクルトがここで引き下がる相手ではない事をよく理解していた。

西武球場で愛するチームの胴上げを心待ちにするファン達。だが監督の顔は彼等とは対照的に曇っていたのだ。

そして野村が先発の名を主審に出した。そこにあつた名は高野だった。

かつて新人でありながら開幕投手を務めた男。だが彼も荒木と同じく怪我に苦しんでいた。そしてこのシーズンの後半に不死鳥の様に甦ってきたのだ。荒木を同じく。

「あいつは不思議な運を持つとる」

野村は言った。彼が投げた試合は打線が必ず爆発したのだ。沈黙した打線を甦らせるには彼の強運に頼るしかない、最早後の無い野村は彼に全てを賭けた。

「これで終わりやったらそれまでや」

試合は三回を終わって両者無得点。しかし四回にヤクルト打線が遂に目覚めた。まず目覚めたのはあの男だった。

パウエルがスリーランホームランを放った。シリーズでの打率が遂に一割を切っていた男の一打が反撃の狼煙となったのだ。

ヤクルトは攻撃を繰り返す。このシリーズではじめて先制点を挙

げたヤクルトは波に乗った。六回を終わって六対零。勝負は決したかに思われた。ライトブルーに身を包んだ観客達も流石に諦めた。しかし諦めていない者達がいた。他ならぬ西武ナインである。彼等は王者の意地をここで見せた。

高野の四球に乗り一気に攻勢に出る。そして高野を打ち崩し一点差に詰め寄った。そして七回だった。

デストラーデがこのシリーズ三本目となるソロアーチを放った。これで遂に同点となった。

最早勝負の行方は誰にもわからなかった。選手達も、監督も、ファンも皆必死だった。

試合は延長戦となった。十回表、バッターボックスには池山隆寛が入った。

池山はこのシリーズ打率一割台、打点は零だった。シリーズ前バツティングが荒く大振りの多い彼は西武投手陣のきめ細かな攻めに手も足も出ないと言われていた。事実そうであった。

マウンドに立つのは潮崎。これまで見事な投球でヤクルト打線を手玉にとっている。シンカーの切れが凄かった。

だがこの時池山もまた覚悟を決めた。彼にも意地があった。

一球目、それは空振りだった。しかし竜巻の如きスイングだった。彼は明らかにホームランを狙っていた。潮崎の手から二球目が放たれた。

彼はその球を無心で振り抜いた。迷いは無かった。

『行けっ！』

彼は心の中で叫んだ。ボールは彼の渾身の力で大空に舞い上がった。そして彼の願いを乗せて飛んでいった。

打球はレフトスタンドに突き刺さった。ヤクルトファンの緑の傘が乱舞した。

池山は叫んだ。そして泣いた。そしてゆっくりとダイヤモンドを回り喜びに沸き返るナインの元へ戻った。

その裏は伊東が抑えた。ヤクルトは血戦を制し神宮へ帰る事が出

知と知の死闘

来た。
来た。

第四章

第六戦がはじまろうとしていた。森はそこで頭を抱えていた。

先発がないのだ。郭はいない。渡辺は第五戦で使った。石井は翌日の為に置いておかなければならない。かといって第四戦の時のような奇策も使えない。鹿取と潮崎の無駄使いは出来ない。

「あの男しかないか……」

森は呟いた。このシリーズ出したくても出せなかった男。監督室にその男を呼んだ。

「いけるか？」

森は男に対して言った。

「いかせて下さい」

男は言った。森はその言葉に頷いた。

「頼むぞ」

だが彼はわかっていて。今の彼にヤクルトを抑える事は出来ない。と。

ヤクルトの先発は荒木、そして西武の先発が発表される。

工藤だった。怪我の為出番の無かった彼がシリーズ第六戦で遂に姿を現わしたのだ。

「……」

森は彼を見て何も言わなかった。ただ沈黙を守っていた。

対するヤクルトはその前の試合から布陣を少し変えていた。橋上秀樹やパリデスがグラウンドにいた。

「わしが動くと碌なことが無いからもう。ここはあいつ等に任せたいわ」

野村は言った。そして選手達はそれに応えたのだ。

試合が始まった。そして再び血戦が幕を開いた。

まず先制したのは西武だった。工藤の併殺崩れの間一点先制。

だがヤクルトは三回に取り返す。前の試合から入っていた橋上が

工藤からソロアーチを放つ。

それで終わりではなかった。飯田がスリーベースを放つ。ヤクルトは逆転に成功した。神宮のライトスタンドに緑の傘が乱舞し東京音頭が鳴り響く。

しかし四回に西武はすぐに反撃に出た。石毛がツーランを放つたのだ。これで形勢は再び西武に傾いた。

この時森は工藤に見切りをつけていた。やはり怪我の影響か投球にいつものキレが無い。渡辺久信をマウンドに送った。

しかしそれが裏目に出た。彼は前日先発をしている。疲れが残っている。しかも昨日打ち崩されている。決死の覚悟で向かって来る今のヤクルト打線を抑えられは出来なかった。

その裏池山のバットが一閃した。ツーランだった。ヤクルトは再度逆転した。

だが六回、西武は再度チャンスを掴む。ランナー二人、森はここで代打を送った。

「代打、鈴木健」

かつて西武の人事を一手に握り『球界一の寝業師』と言われた根本陸夫が得意の困い込みで獲得した選手である。その打撃センスには定評がある。

ヤクルトの投手は金沢。古田とのバッテリーとの間に緊張が走る。鈴木は打った。打球はそのまま飛んでいく。そしてスタンドに吸い込まれていった。

逆転スリーランだった。西武はまたもや試合をひっくり返したのだ。

「流石やの。こんな強い奴等見た事ないわ」

野村は忌々しげに呟いた。二点差、この差は大きかった。

しかしその裏ヤクルトは再び攻め立てる。満塁の絶好のチャンスを作る。

ここで野村は動いた。主審に代打を告げる。

「代打、杉浦」

その名を聞いた観衆が沸き返る。第一戦でのあの代打サヨナラ満塁アーチが彼らの脳裏に甦る。

しかしここでの結果は少し拍子抜けするものであった。彼はボールを慎重に見極め四球を選んだ。これで一点差となった。

西武はここで踏ん張りそれ以上の得点を許さなかった。試合は終盤に入った。

七回裏、パウエルが打った。ソロアーチだった。ヤクルトは二点差を追いついたのだ。

それだけでヤクルトは満足しない。パリデスがタイムリーを放つ。何とまたもや逆転したのだ。これで両チーム合わせて五回目の逆転である。

試合はヤクルトのものになりつつあった。流石に西武ファンも諦めた。選手達も次の試合を考え出していた。

しかし終盤で驚異的な粘りを見せるのが西武であった。そしてこの時もそうであった。

西武には一人の策士がいた。伊原春樹。西武の守備走塁コーチであり三塁コーチボックスで現場の作戦指揮を執る走塁のスペシャリストである。西武の機動戦はよく知られていたがそれは彼の力によるところが大きかった。

九回表、既にツニアウトとなっていた。打者は二番の大塚。俊足で知られる若手である。彼は必死に粘って四球を選んだ。

ここで伊原の目が光った。バッターボックスにいるのは秋山。ここぞという時に頼りになる男である。

しかし彼は秋山を見てはいなかった。彼が見ていたのは一塁にいる大塚、そしてヤクルトの外野陣だった。

ヤクルトのセンターは飯田。俊足を生かしたその守備は最早職人の域であり捕手出身であることから肩も抜群に強い。

だがライトの秦は違う。肩はともかく守備はお世辞にもいいとは言えない。彼はその二つから一つの策を思いついた。

大塚を走らせようとの考えはこの場では止めた。ヤクルトのキャ

ツチャーは古田、スチールを仕掛けてもそう容易に塁を奪える男ではない。下手に気付かれては全ては水の泡だ。伊原は慎重に気を窺っていた。

秋山が打った。打球は伊原の願い通りライト前に落ちた。予想通り秦の動きは悪い。

「今だ！」

俊足大塚は二塁を回って三塁へ進む。そこで止まると誰もが思った。次は主砲清原である。絶好のチャンスだ。

だが伊原はその右手を大きく振り回した。大塚は一瞬戸惑う顔をしたが脚を止めることはなかった。そのまま三塁を回った。

ヤクルトナインは驚愕した。秦が慌てて送球し中継を経てホームへ投げられる。古田が大塚を食い止めんとする。

大塚も必死に走る、駆ける。ここで死んでは全てが終わる。もう後が無いのだ。

ホームで両者が激突した。観衆も両方のナインも監督も静まり返った。主審がその手をゆっくりと動かす。

「セーフ！」

その右手が横に切られる。西武ナインが、三塁側スタンドが喜びに沸き返る。

伊原はかつて八七年の巨人戦で当時の巨人のセンタークロマティの緩慢な守備を衝き一塁の辻にホームまで突入させたことがある。シリーズの流れを決定付けた有名な進塁だ。

そして今度もそれをやった。策士、走塁のスペシャリスト伊原の面目躍如であった。

試合はこれで再び振り出しに戻った。このシリーズ三度目の延長戦に入った。

十回裏ワンアウトランナーなし。バッターボックスには先程大塚にホームインを許した秦がいた。

実は彼は肘に遊離軟骨を抱えており痛み止めの注射を打ちながら試合をしていた。しかも彼は内角の変化球に弱くそれがいつも意識

下にある為ストレートに凡打する事も多かった。当然それは西武バツテリーにも知られていた。しかもマウンドにいるのは潮崎。彼のスライダーは左打者である秦に対してはとっておきの武器だった。西武バツテリーは主にストレートで彼を釣ろうとする。それは全てボールだった。彼は動かない。

「・・・・・・・・・・」

その彼の顔を西武の捕手伊東はチラリ、と見た。そしてサインを出す。それは切り札、内角へのスライダーであった。

潮崎は頷いた。そして投球モーションに入った。

秦はこの時確信していた。西武バツテリーは必ず自分の弱点である内角に変化球を放ってくる。だがそれが何時なのかはわからない。彼はじつとそれを待っていた。

彼はそのスライダーにバットを乗せた。ボールはそのまま高く飛んだ。

「行けー！ー！ー！」

秦だけではない。ヤクルトナインも、一塁のヤクルトファン達もボールに叫んだ。ボールは彼等の願いを乗せて空高く飛んでいく。

勝利の女神がそれに応えたか。ボールはライトスタンド、ヤクルトファン達がいるその場に飛び込んだ。四時間を越える死闘はここに幕を降ろした。

緑の傘とヤクルトナインに迎えられる秦。彼はホームベースを踏んだ時には泣いていた。

ヤクルトは絶体絶命の状況から遂に逆王手をかけた。野村は押しかける報道陣に対して言った。

「ここまで来たら結果はどうでもええ。野球をやっていて良かったつちゅうゲームをしたいわ。今夜のミーティングで言うわ」

普段の無然として嫌味な言い方を好む彼とは違った言葉だった。その言葉は弾んでいた。流れが自分達に来ている事を確信していた。だからこそ言ったのだ。

対する森の顔は暗かった。主砲清原も不振に陥っている。潮崎が

二日連続で決勝アーチを浴びたのも痛かった。残るカードは少ない。だが彼は最後のカードをこの時の為に置いていた。そしてそのカードを引いた。

「……………頼むぞ」

森は彼に対し言った。

「……………はい」

彼は静かに頷いた。彼もまた腹をくくった。

第五章

そして遂に最後の戦いが幕を開けた。泣いても笑ってもこの試合で全てが決まる。両者は神宮の社に集結した。

先発は最早決まっていた。ヤクルトは岡林。西武は石井丈裕。岡林はこのシリーズ三度目の先発だ。既に二完投、疲れが心配されるが彼しかない。

それは西武の同じだった。この時の為にあえて残していた最後の切り札。森は彼にすべてを託した。

「頼んだぞ……」

二人は両エースを見た。遂にプレーボールが宣言された。

まずは勢いそのままに四回にヤクルトが先制する。ファン達の喚声はその場を支配する。

しかし西武のしぶとい。七回に攻勢に出た。

まずデストラーデがエラーで出塁する。そしてツーアウトランナー一、二塁。絶好のチャンスにバッターはピッチャーの石井丈裕。

「ここは代打やな」

野村はそう読んでいた。左の技巧派である角をブルペンに向かわせていた。彼は右の岡林に対して左の代打が来ると読んでいたのだ。それは誰もが同じであった。

だが森は動かなかつた。何と石井をそのままバッターボックスに送ったのだ。

「森は一体どういうつもりや!？」

野村はいぶかしんだ。パリーグではバッターは打たない。セリーグのそれと比べて打撃に疎いのは明らかである。

実は森は別の意味で彼を打席に送ったのだ。

「八回、若しくは九回にもう一度チャンスが回ってくる筈だ。今はヤクルトの追加点を防ぐ方が先だ」

森は常に最悪のパターンを予想しそれを未然に防ぐ策を採る。マ

イナス思考から発する独特の森イズムだ。しかし八回と九回に再びチャンスが回ってくるとは限らない。しかしヤクルトがこれ以上得点を入れる事は西武の敗北を意味する。

「だとすれば……」

最早西武でヤクルト打線を完全に抑えられるのは彼しかない。森もまた腹をくくっていたのだ。

ここで石井は森の予想以上の働きをする。石井は打ったのだ。

打球はゆっくりと右中間に上がっていく。飯田がそれを追う。

しかしこの時彼はバツホームに備え前に守っていた。それが仇となってしまった。

ボールは飯田のグラブを弾いた。そしてそれが何と同点打となったのだ。

「何と……」

これにはさしもの森も驚いた。西武ベンチが喜びに包まれる。

「一点……あとはこれを守りきる。そして次の機会を待つぞ」

森はここで第四戦以降全く当たっていない清原をベンチに退けた。そして守備を固めたのだ。

「ここで看板の主砲を引っ込めるかい。何としても守りきるつもりやな」

野村は西武のベンチを見て言った。

「だがそうはさせんで」

その裏ヤクルトは石井を攻め立てた。ワンアウト満塁の絶好のチャンスだ。

ここで野村は代打を送る。またしても杉浦だ。

「ここで打ったら御前は英雄になるぞ」

野村は杉浦に対して言った。杉浦はその言葉に黙って頷いてバツタボックスに向かった。その背に大歓声を受けながら彼は落ち着いていた。

打球は打ち損じであった。バットが根元から折れる。

打球は一二塁間を転がる。打球は難しい場所に転がった。セカンドの辻がそれを追う。グローブの先で打球を捕った。ゲッツーには出来そうもない。彼はホームへ送球した。

しかしそれは逸れてしまった。高い。伊東は跳んだ。

三塁ランナーは広沢。その身体を生かして果敢に突っ込む。

彼はホームゲッツーを避ける為伊東を吹き飛ばすつもりで突っ込んで来たのだ。この時彼はそれだけを考えていた。その図体に似合わず彼は意外と足も速かった。

この時彼は送球が高かった事は見えていなかった。そしてあまりにも直線的な突入であった。

彼は伊東が着地したその場に突っ込んだのだ。伊東はそれを凌いだ。広沢は無残にもホームで憤死した。

それでもヤクルトは石井を再三に渡って攻め立てる。八回には一死満塁、九回には二死一、二塁。しかし石井はここで踏ん張る。試合は延長戦に突入した。

「これで四回目の延長戦か。ここまで長い戦いは始めてだな」

森は呟いた。だが同時に決着の時が近付いている事もわかっていった。

「このシリーズでわし等は延長戦は全て勝つとる。今日ももらうで、そして日本一や！」

野村がナインに言った。そして両者はグラウンドに戻った。

十回表、西武の先頭バッターは辻であった。流し打ちが得意で首位打者を獲ったこともあるパリーグ、いや当世きつての技巧派である。こうした場面では実に嫌な男だ。

その辻が打った。レフト線を越えるツーベースだ。明らかに疲労の見られる岡林のスライダーを見事に打った。流し打ちではない。思いつきり引つ張ってきたのだ。

「ここで決める！」

もりはこれを絶好の勝機と確信した。まずは大塚に送りバントをさせる。これで一死三塁。岡林に、ヤクルトナインに緊張が走る。

シリーズで最大のピンチを迎えた。

神宮が静まり返る。野村も、森も黙ってバッターボックスに向かう。痩せて引き締まった身体つきの男を見ていた。

「三番、センター秋山」

ウグイス嬢がその名を告げる。その前の年にシリーズMVPとなりこのシリーズでも第四戦で決勝アーチを放っている。清原がベンチにいる今西武で最も怖ろしい男だ。

「この男さえ凌げれば……!」

岡林は意を決した。逃げない。キャッチャー古田も、野村も腹をくくった。

「岡林と心中だ」

ヤクルトナインも頷いた。ここで逃げても何の意味も無いからだ。抑えるんや。そして石井を打ち崩して日本一や」

野村は言った。だがここで古田の配球は秋山にある程度読まれていた。

ここである程度とはいえ読まれるのは敗北を意味する。秋山は岡林のボールを打った。

「しまった!」

古田はマスクを放り投げて打球を目で追った。後で野村は彼の配球をなじった。

「何ちゆう配球しとんのや」

と。それを彼は後々まで悔やむことになる。

打球はゆるゆると上がっていく。力は無い。だがそれはヤクルトナインとファンを絶望させるには十分な打球であった。

打球はセンターフライであった。飯田が捕った。その瞬間ヤクルトナインは奈落の底に落ちた。

辻が打球を確認して走る。如何に飯田の肩が強かろうが彼を止める事は不可能だった。西武は貴重な一点を手に入れた。

「まだ勝負は続くで」

それでも野村は諦めない。ヤクルトナインも絶望から目を覚まし

た。ファンも最後の攻撃に希望を託す。

「この回を凌げば……」

森は呟いた。これは秋山を前にしたヤクルトナインや野村と全く変わらない言葉だ。しかし状況が違う。

石井の身体に何かが宿った。そしてその投球は将に鬼神が宿ったかの如きだった。

石井は投げる。そしてヤクルト打線を全く寄せ付けない。これまで以上の凄まじい投球だった。

そして最後のバッターパウエルが空を切る。長い戦いがここに幕を降ろした。

「やったぞー！ーっ！！」

その瞬間石井は両手を上げガッツポーズをした。その瞬間西武ナインは喜びに包まれた。

三連覇。またしても日本一となった。優勝には慣れている。だがこの時は違っていた。

「やっと勝った……俺達は勝ったんだ……」

西武にこの男ありと言われた石毛が泣いている。何度も日本一を経験している男が泣いていた。

「俺は初めて見た。自分のチームの選手が勝って泣いているのを」
森は言った。彼にとってもつらく苦しい戦いだった。

「精神的にもこたえた。遊び、読みの出来ないシリーズだった」
そして最後にこう言った。

「こんなに苦しい戦いは初めてだったよ」

巨人の正捕手だった頃からシリーズを知っている男が言った。実に深い言葉だった。

森は宙に舞う。そして石毛が。西武は勝者となったのだ。

それを黙って見る男がいた。敗れたヤクルトの将、野村である。彼をマスコミが取り囲んだ。野村は彼等に対し言った。

「まさかな七戦までいくとは思わなかったな。どの試合も采配を振るうわしが手に汗握った。うちの選手がシリーズを盛り上げたんや。

セリーグの覇者の面目は保つたな」

その言葉は意外だった。彼のその言葉には嫌味が無かった。しかし彼はふと立ち止まって言った。

「うちはまだまだ何をとつても未熟や。それが最後に出たな」

彼はそう言うのと死闘が行われた暮れかかる神宮の社を後にした。

長い戦いだった。西武圧倒的有利と言われながらも若いヤクルトは果敢に戦った。そしてあわや、というところまで王者西武を追い詰めた。だがそこまでだった。

気力を振り絞って投げ抜いた岡林は遂に一勝も出来なかった。その力投を評価されシリーズ敢闘賞をもらっても彼の心は晴れなかった。勝負に勝てなかったからだ。

飯田は石井のボールを捕れなかった。広沢はホームを奪えなかった。辻のボールを見ずに突っ込んでしまった。そして古田の最後の配球――。ファンは言った。

「西武相手によくやった！」

と。だがその言葉で彼等が慰められる筈もなかった。

あと少しだった。あと一点。だがその少しが限り無く遠くあと一点がはてしなく多い点だった。その少し、一点こそがヤクルトと西武の差だったのだ。その少し、一点を果てしないものにする。それが王者西武の強さだったのだ。

ヤクルトナインは敗北の屈辱を噛み締め戦場を去った。そして胸の内にある決意を秘めた。

「打倒西武！」

彼等は早速次のシーズンに向けて動きはじめていたのだ。その屈辱を、無念を晴らす為に。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6068a/>

知と知の死闘

2008年11月7日08時28分発行